

希望の鐘が響く未来へ

伝染する病、遺伝する病……。そんな間違った認識で強制隔離され、あらゆる差別や偏見と闘ってきたハンセン病患者。過酷な生活に耐えながら懸命に生きてきました。

そして、治療を終えた入所者が社会復帰して園を退所するとき鳴らされていたのが「希望の鐘」。

鐘が鳴り響く音はまさに、退所者の希望ある未来を願うものであり、入所者が社会復帰への希望を見出す音でした。

鐘は昭和35年前後まで頻繁に鳴らされていたが、さびて音が鳴らなくなり、取り外されていました。

しかし、平成28年に来園した佐賀県から鐘の復元・寄贈の申し出がありました。平成29年3月、社会交流館前に復元され、再びその音を響かせました。過酷な歴史を背負い、それでも希望ある未来をつないでいこうとする入所者と、それを支える周囲の人たち——その象徴のように希望の鐘は凜と立っています。



過去から未来へつなぐもの

菊池恵楓園には園やハンセン病に関する資料を見られる、社会交流館という施設があります。

その会館で学芸員を務める、原田寿真さん。学芸員という立場で見た、ハンセン病や恵楓園、入所者の皆さんに対する思いを伺いました。



社会交流会館 学芸員
原田 寿真さん

自分の問題としてとらえる鏡

会館を訪れる人の数は、年々増えているように感じます。全国の他の療養所も見て回っているという熱心な人や、親子で訪れる人もいます。

当館の展示の最後には鏡が設置され、その横には「あなたの中に差別の心はありませんか?」と書かれています。県外から訪れた人に「あの鏡と文字を見てどきりしました」

と言われたことがあります。

ただ展示物を見てもらうのではなく、それを自分の問題としてとらえてほしいです。



▲最後に展示されている鏡

明るく生き抜く力

入所者の皆さんは明るい人が多いという印象です。暗い歴史があったことは事実ですが、皆さんそれを乗り越えて次の段階へ歩んできました。隔離政策の廃止に始まり、さまざまな人権問題を進展させてきたのです。それが、明るさにつながっているのだと思います。

人間は未来へ向けて生き抜く力を持っているのだということを強く感じます。

未来に伝えていく歴史

会館は展示物以外にも膨大な資料が保管されています。そこには園内で生きてきた人の歴史そのものが残っています。歴史を正確に、子ど



▲入所者が人権問題の解消に向け闘ってきた歴史を語る展示物

もたちや後世に伝えるため、資料や情報をしっかり整理し研究していく。過去から未来へつないでいく。それが会館の役目です。

ハンセン病に関する問題はたびたび注目されてきました。けれどそれを表面的なもので終わらせてはいけません。研究したものを教育に転換していきます。

菊池恵楓園110年の歴史を歩む

監禁室 (1917 年建設)



脱走者や規則違反者が収容された監禁室。内部の壁には、収容された人たちの心の叫びが文字として刻まれています。

旧火葬場跡 (1920 年建設)



園内で亡くなった患者の火葬のために使用。跡地にはやすらぎの碑が建設されています。この火葬作業自体は40年にわたり患者自身の手で行なっていました。

日光回転家屋 (昭和初期)



熊本市黒髪私立療養所、回春病院から移築。建物を日の向きに合わせて回転できます。黙想や患者の相談時に使用されました。

隔離壁 (1929 年建設)



脱走防止のために、園の北側と西側に高さ約2mのコンクリート塀が設置されました。深い堀や板塀もあり、園内と外の世界を遮断していました。現在、社会交流会館に一部展示し、北側には当時のまま現存しています。